『往生要集』の別相観

――『観仏三昧海経』の影響をめぐって――

福原隆善

序

叡山浄土教史上、色相観のすぐれた念仏を示した恵心僧都源信（九四二―一〇一七、以下源信）の『往生要集』には、別相観、総相観、雑略観などが説かれていることは周知のことであるが、その内容がどこからきたものなのか①、また典拠とした経典など、どういう点に基いて定められたものなのか、などということについての論究は、まだほとんどなされていないといってもよい。さらに別相観、総相観との関係はどうか、総相観と雑略観の関係、あるいは三種の観相の複数的関係、さらに極略観の位置づけ、一心称念と観相との関係、等々多種多様の問題を含んでいる。いまこれらの一つ一つを明確にしていくことは困難を伴い、すべてについて到底果たしうることではない。そこで本稿では事相念仏として示された別相観の内容とこれらの諸相がどの経論疏に基づいて定められているのか、またその基づく理由について明らかにできればと考えている。私は以前に『往生要集』の別相観が、三十二相ではなく、四十二相の定められる理由について論究してきた②。本稿はこれをふまえて、とくに『観仏三昧海経』を中心に『往生要集』の別相観との関係を探り、その特色を究明してみたいと思う。

一

『往生要集』の別相観のいちいちの相がどの経典に基づいて定められているかについて、源信は各相の内容について記述したあとに、割註などによってその典拠を示しているものがあるが、すべての相について明確にはしていない。源信は『往生要集』において、各相を定めるなかで、とくに根拠をおいたものとして

是諸相好。行相利益廢立等事。諸文不レ同。然今三十二略相。多依二大般若一。廣相隨好。及諸利益。依二觀佛經一。[3]

と述べているように、『大般若経』と『観仏三昧海経』の二経にあることを表明している。そこで『往生要集』の別相観の四十二相の典拠について、前二経のほか『往生要集』自身に経論疏名をあげているものに従って諸相を調査し、その特色をあげ、とくに四十二相の順序を含めてこれを検討してみると、やはり諸相の典拠は源信自身が明らかにしているように『大般若経』と『観仏三昧海経』を重視していることが知られるのである。諸相の内容や頂上肉髻から観相する順序など、この二経に負うところが大である。以下これらの内容を対照表にしてみると次のようになる。三十二相と八十随形好の間で出入りするものや、それらがまったく区別のつかない『観仏三昧海経』の場合もあるが、[4]

往生要集	大般若経	大集経	無上依経	報恩経	優婆塞戒経	大智度論	法華文句	観念法門	観仏三昧海経
1 頂上肉髻	○	○		○	○	○	○		○
2 頂上髪毛	○						○	○	○
3 髪際五千光									○
4 耳厚広長									○
5 額広平正								○	○

6 面輪円満	7 眉間白毫	8 如来眼睫（牛王眼）	9 仏眼青白	10 鼻修高直	11 脣色赤好	12 四十歯斉	13 四牙鮮白	14 舌相広長	15 舌下宝珠	16 咽喉瑠璃	17 頸出円光	18 頸出二光	19 缺盆骨満相	20 肩頂円満	21 腋下充実	22 仏双臂肘	23 諸指円満
○	○	○	○			○	○	○						○	○		
	○	○	○			○		○								○	
	○	○	○			○	○	○		○				○	○	○	
	○	○	○			○		○								○	
	○	○				○	○	○									
	○	○				○		○						○	○		
	○	○	○			○		○						○			
	○			○	○			○									
					○			○					○				

往生要集	大般若経	大集経	無上依経	報恩経	優婆塞戒経	大智度論	法華文句	観念法門	観仏三昧海経
24 指間鞔網	○							○	
25 其手柔軟									○
26 領臆広大	○								
27 胸有卍字							○		○
28 心相妙光									○
29 身皮金色	○	○	○	○	○	○	○		
30 身光任運									○
31 身相直広	○		○			○	○		
32 体相縦広	○								○
33 容儀端直	○		○						○
34 如来陰蔵	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35 両足充満								○	
36 双腨纖円	○							○	
37 足跟円満	○		○			○	○		
38 足跟修高	○					○			
39 身八万四千毛									
40 足下千輻輪	○	○	○	○	○	○	○	○	○

41 足下平満相	○	○	○	○		○	○	○
42 足下生一華								

四十二相の内容について一致するものを表にしたものである。[5]

この表により『往生要集』が諸経論疏より受ける影響の特色をあげると、とくに源信自身が表明している『大般若経』と『観仏三昧海経』を中心に比べてみると、まず数量的にどちらも二十三相と二十四相という他論疏を圧倒する数であり、この二経を重視していることが知られる。そしてこの二経については、『観仏三昧海経』は主に如来の首から上の上半身に、『大般若経』は首から下の下半身に集中していて、その依りかたの異なることが注目される。さらに注視すると、『観仏三昧海経』に依っている相の内容として、光明に関するものが相当数あることがわかる。源信の『往生要集』の色相観の背景をなすものとして、自毫観のあることが知られている。雑略観と極略観はまさに白毫観であり、総相観もその説明のほとんどが白毫観の内容である。さらに別相観についても、四十二相中、二十六相までが光明に関する内容をもっていて、白毫観の典拠となっている『観無量寿経』によれば、白毫は光明摂取のはたらきとして説示されていることが明らかで、光明摂取のはたらきが四十二相の諸相の背景となっていることが知られるのである。[6] ところが、この光明摂取のはたらきは、『観無量寿経』に依るのみならず、『観仏三昧海経』の所説の影響を受けていることが明らかとなってくる。[7] いまここにとくに光明の内容の記述を中心とする『往生要集』の諸相と相当すると思われる『観仏三昧海経』の文をあげて比較してみると次のようになる。先きに示した表によれば、『往生要集』と一致するのは二十四相である。『往生要集』への影響については後ちに検討を加えることとして、諸相の一致するものについて比較してみると次のようである。長文になるが範をいとわずあげてみたい。

『往生要集』	『観佛三昧海經』
(1)一頂上肉髻。無二能見者一。高顯周圓。猶二如天蓋一。或	(1)佛告父王。云何名觀如來頂。如來頂骨團圓猶如合捲。

樂二廣觀一者。次應レ觀。彼頂上有二大光明一。具二足千色一。一一色作二八萬四千支一。一一支中。有二八萬四千化佛一。化佛頂上。亦放二此光一。此光相次。乃至二上方無量世界一。於二上方界一有二化菩薩一。如レ雲而下。圍二遶諸佛一。大集經云。恭二敬父母師僧和上一。得二肉髻相一。云云。若於二此相一。生二隨喜一者。除二却千億劫。極重惡業一。不レ墮二三途一。⑧

(2)二頂上八萬四千髮毛。皆上向靡。右旋而生。永無二褫落一。亦不二雜亂一。紺青稠密。香潔細輭。或樂二廣觀一者。應レ觀。一一毛孔旋二生五光一。若申レ之時。修長難レ量。如釋尊髮長。從二尼拘樓陀縛舍一。至二父王宮一。遶レ城七匝。無量光普照。作二紺瑠璃色一。色中佛。不レ可二稱數一。現二此相一已。還住佛二頂一。右旋宛轉。卽成二蠡文一。大集經云。不下以二惡事一加二衆生一故。得二髮毛金精相一。⑩

(3)三於二其髮際一。有二五千光一。間錯分明。皆上向靡。圍二遶諸髮一。遶レ頂五匝。如二天畫師所作畫法一。團圓正等

其色正白。若見薄皮則爲紅色。或見厚皮則金剛色。髮際金色。腦頗梨色。有十四脈衆畫具足。亦十四光其光如脈分明了了。於腦脈中旋生諸光上衝頭骨。從頭骨出乃至髮際。有十四色圍遶衆髮。髮下金色亦生衆光。入十四色中。是名如來生王宮中頂腦肉髻。惟其頂上五大梵相生。時摩耶及佛姨母皆悉不見。其五梵相開現光明至於梵世。復過上方無量世界。化成宮臺。諸佛境界。十地菩薩之所不見。今爲父王說生頂相。若有聞者應當思惟佛勝頂相。其相光明。如三千界大地微塵。不可具說。後世衆生若聞是語。思是相者心無悔恨。如見世尊頂勝相光。閉目得見。以心想力了了分明如佛在世。⑨

(2)佛告父王。及勅阿難。諦聽諦聽善思念之。如來今者頭上有八萬四千毛。皆兩向靡右旋而生。分齊分明四抓分明。一一毛孔旋生五光。⑪

(3)次觀髮際。如赤眞珠色婉轉下垂。有五千光間錯分明。皆上向靡圍遶諸髮。從頂上出遶頂五匝如天畫師所作畫

細如二一絲一。於二其絲間一。生二諸化佛一。有二化菩薩一。以爲二眷屬一。一切色像。亦於レ中見。⑫

(4)四耳厚廣長。輪埵成就。或應二廣觀一。旋二生七毛一。流二出五光一。其光千色。色千化佛。佛放二千光一。遍照二十方無量世界一。此隨好之業因可レ勘觀佛三昧經云。觀二此好一者。滅二八十億劫生死之罪一。後世常與二陀羅尼人一爲二眷屬一。云云。下云二諸利益一。⑭皆亦觀佛三昧經而註。

(5)五額廣平正形相殊妙。此好業因竝利益可レ勘。⑰

(6)七眉間白毫。古旋宛轉。柔輭如二觀羅綿一。鮮白逾二珂雪一。或次應二廣觀一。舒レ之直長大。如二白瑠璃筒一。放已右旋如二頗梨珠一。丈六佛白毫。長丈五。右旋徑一寸。周圍三寸。於二十方面一。現二無量光一。如二萬德日一。不レ可二具見一。但於二光中一。現二諸蓮華一。上過二無量塵數世界一。華々相次。團圓正等。一一華上。一化佛坐。相好莊嚴。眷屬圍遶。一一化佛。復出二無量光一。一一光中。亦無量化佛。是

法。團圓正等細如一絲。於其絲間生諸化佛。有化佛。有化菩薩以爲眷屬。諸天八部一切色象亦於中現。色如日輪不可具見。是名觀佛髮際。⑬

(4)佛告父王。云何觀佛耳。佛耳普垂埵旋生七毛輪郭衆相。及生王宮初穿耳時。令兩耳孔內外生華。此蓮華中及耳七毛。流出諸光有五百支。支五百色色出五百化佛。佛五菩薩。有五比丘以爲侍者。遶光右旋其數五匝。上下正等映照佛耳。佛耳可愛。如寶蓮華懸處日光。佛在世時。一切大衆咸見是相。是名佛耳色相光明。⑮

耳出五光其千色。色千化佛。佛放千光。如是光明遍照十方無量世界化成一華。⑯

(5)云何觀如來額廣平正相。額廣平正相中有三相。⑱

(6)佛告父王如來有無量相好。一一相中。八萬四千諸小相好如是相好。不及白毫少分功德。是故今日。爲於來世諸惡衆生。說白毫相大慧光明消惡觀法。若有邪見極重惡人。聞此觀法具足相貌。生瞋恨心。無有是處。⑳

諸世尊。行者無數。住者無數。座者無數。臥者無數。或說二大慈大悲一。或說二三十七品一。或說二六波羅蜜一。或說二諸不共法一。若廣說者。一切衆生。至二十地菩薩一。亦不レ能レ知レ之。大集經云。不レ隱二他德一。稱揚其德一。得二此相一。觀佛經云。從二無量劫一晝夜精進。身心無レ懈。如レ數二頭然一。勤二修六度一。三十七品。十力無畏。大慈大悲。諸妙功德一。得二此白毫一。觀二此相一者。除二却九十六億一。那由他恆河沙微塵數劫生死之罪一。⑲

(7)八如來眼睫。猶二若牛王一。紺青齊整。不二相雜亂一。或次應二廣觀一。上下各生。有二五百毛一。如二優曇華鬚一。柔輭可二愛樂一。一一毛端。流二出一光一。頗梨色一遶レ頭一匝純生二微妙諸青蓮華一。一一華臺有二梵天王一。執二青色蓋一。大集經云。至心求二於無上菩提一。故得二牛王一。睫相一大經云。見二於怨憎一生二於善心一故。㉑

(8)九佛眼青白。上下俱眴。白者過二白寶一。青者勝二青蓮華一。或次應二廣觀一。眼出二光明一。分爲二四支一。遍照二十方無量世界一。於二青光中一。有二青色化佛一。於二白光中一。有二白色化佛一。此青白化佛。復現二諸神通一。大集經云。修二集慈心一。愛二視衆生一。得二紺色目相一云云。於二少時間一。觀二此相一者未來生處。眼常明淨眼根無レ病。除二劫生死之罪一。㉓

---

(7)云何觀如來眼睫相。如來眼睫。上下各生有五百毛。柔軟可愛如優曇華鬚。於其毛端流出一光。如頗梨色入前衆相。光明色中遶頭一匝。從枕骨生圍遶前光。純生微妙諸青蓮華。蓮華臺上有青色蓋。有梵天王手執是蓋。㉒

(8)此相現時佛眼青白。白者過於白寶。百億萬倍。青者勝青蓮華及紺琉璃。百億萬倍。上下俱眴如牛王眼。眼雙背頭旋出二光。如青蓮華極爲微細。遶髮一匝從枕骨出。映飾諸華令華開敷。光明益顯。如是勝相無量功德。名如來眼。若有欲觀如來眼者。當作此觀。作此觀者減損諸惡。閉目端坐正觀佛眼。一日至七日。於未來世常得見佛。終不盲冥。亦不生於邊地邪見無佛法處。慧眼恒開不生愚癡。佛告父王。是故智者爲除盲冥。當觀佛眼。

(9)十鼻修高直。其孔不レ現。如二鑄金鋌一。如二鸚鵡觜一。表裏清淨。無二諸塵翳一。出二二光明一。遍照二十方一。變二作種々無量佛事一。觀二此隨好一者。滅二千劫罪一。未來生處。㉕聞二上妙香一常以二戒香一爲二身瓔珞一。

(10)十一脣色赤好。如二頻婆果一。上下相稱如レ量嚴麗。或次應二廣觀一。團圓光明。從二佛口一出。猶二如百千赤眞珠貫一。入二出於鼻白毫髮間一。如レ是展轉。入二圓光中一。此脣隨好業㉗等可レ勘。

(11)十二四十齒齊。淨密根深。白逾二珂雪一。常有二光明一。其光紅白。映二耀人目一。大經云。遠離兩舌惡口恚心。得二四十齒一。鮮白齊密相。十三

佛有五眼。此觀法中先說肉眼。明淨光現觀眼心利。傍生境界不可具說。諦觀佛眼於少時間及觀像眼。未來世中經五生處。眼常明淨眼根無病。除却七劫生死之罪㉔。

(9)云何名觀如來鼻相。如來鼻高脩而且直當于面門。如來鼻端如鷹王嘴。鼻孔流光上下灌注。上者上入眼眉白毫相髮際。如是直入頂肉髻骨。譬如金幢。從枕骨出變成衆華。華上皆有天諸樂神手執樂器。遍入一切諸化佛間。以爲導從遶光十匝。下者直至入佛髭中。圍遶髭毛。令髭毛根有華開敷。如稊米粒。流入脣腭至諸齒間映飾咽喉。下至佛胸成光明雲。表裏清淨無諸塵翳。如琉璃器成金光焰。是名如來眞淨鼻相。佛滅度後佛諸弟子如是觀者。除滅千劫極重惡業。未來生處。聞上妙香心意了了不著於香。常以戒香爲身瓔珞。如是觀者名爲正觀㉖。

(10)云何觀如來脣色赤好如頻婆果相。於上下脣及與斷腭。和合出光。其光團圓。猶如百千赤眞珠貫㉘。

(11)從佛口出入於佛鼻。從佛鼻出入於白毫。從白毫出入諸髮間。從髮間出入圓光中。映飾諸華。口四十齒印上生

四牙鮮白。光潔鋒利。如三月初出一。大集經云。身口意淨故。得二四牙白相一云云。觀二此脣口齒相一者。滅二二十劫罪一。㉙

(12)十四世尊舌相。薄淨廣長能覆三面輪一。至三耳髮際。乃至梵天一。其色如三赤銅一。或次可二廣觀一。舌上五畫。猶二如印文一。笑時動レ舌。出三五色光一。遶佛七匝。還從レ頂入。所有神變。無量無邊。大集經云。護二口四過一。得二廣長舌相一。云云。觀二此相一者。除二百億八萬四千劫罪一。他世値二八十億佛一。十五舌下兩邊。有二二寶珠一。流二注甘露一。滴二舌根上一。諸天世人。十地菩薩。無二此舌根一。亦無二此味一。大般若有二異說一可レ勘。大經㉛云。飲食施與故。得二上味相一。

(13)十六如來咽喉。如二瑠璃筒狀一。如二累蓮華一。所出音聲。詞韻和雅。無レ不二等聞一。其聲洪震。猶二如天鼓一。所レ發言婉約。如二伽陵頻音一。任運能遍二大千世界一。若作意時。無量無邊。然爲レ利二衆生一。隨レ類不二增減一。大經云、不レ訟二彼短一。不レ謗二正法一。得二梵音聲相一。大集經云。於二諸衆生一。常柔輭語故。云云。㉝

(14)十七頸出二圓光一。咽喉上有二點相分明一。一一點中。出二一一光一。其一一光。遶三前圓光一。滿三足七匝一。衆畫分明。一一畫間有二妙蓮華一。華上有二七佛一。一一化佛。

光。其光紅白光光相照。照四十齒。令四十齒根。自然齊白如頗梨壁。上下齊平無參差者。齒間文畫流出諸光亦紅白色。如是衆色。佛在世時暎耀人目。佛滅度後。當以心眼觀見此色。㉚

(12)云何觀如來廣長舌相。如來舌者。是十波羅蜜十善報得。其舌根下及舌兩邊。有二寶珠。流注甘露滯舌根上。諸天世人。十地菩薩。無此舌相亦無此味。舌上五畫如寶印文。如此上味入印文中。流注上下入琉璃筒。諸佛笑時動其舌根。此味力故舌出五光五色分明。遶佛七匝還從頂入。佛出舌時。如蓮華葉。上至髮際遍覆佛面。㉜

(13)如來咽喉如琉璃筒。狀如累蓮華相者。自有衆生樂觀如來廣長舌相蓮華葉形。㉞

(14)咽喉上有點相。分明猶如伊字。一一點中流出二光。其一一光遶前圓光。足滿七匝衆畫分明。一一畫間有妙蓮華。其蓮華上有七化佛。一一化佛有七菩薩以爲侍者。

各有二七菩薩一。以爲二侍者一。一一菩薩執二如意珠一。其珠金光。青黃赤白。及摩尼色皆悉具足。圓二遶諸光一。上下左右。各各一尋。圍二遶佛頸一。了々如レ畫。無上依經云。衣服飲食。事乘臥具諸莊嚴物。歡喜施與得二身金色。圓光一丈相一。十八頸出二二光一。其光萬色遍照二十方一切世界一。遇二此光一者。成二辟支佛一。此光照二諸辟支佛頸一。此相現時。行者遍見下十方一切。諸辟支佛。擲二鉢虛空一。作二十八變一。一一足下。皆有二文字一。其字宣中說十二因緣。㉟上

(15)十九缺盆骨滿相。光照二十方一。作二琥珀色一。遇二此光一者。發二聲聞意一。是諸聲聞見二此光明一。光分爲二千支一。一支千色。十千明明。光有二化佛一。一一化佛。有二四比丘一。以爲二侍者一。一一比丘。皆說二苦空無常無我一。已上三種。樂二廣觀一者。應レ用レ之。㊲

(16)二十五其手柔輭。如二覩羅綿一。勝二過一切一。內外俱握。大集經云。父母師長若病苦。自手㊴洗拭。提持按摩。故得二手輭相一。

(17)二十七胸有二卍字一。名二實相印一。放二大光明一。或次應二廣觀一。光中有二無量百千衆華一。一一華上。有二無量他佛一。是諸化佛。各有二千光一。利二益衆生一。乃至遍入二十方佛頂一。時諸佛胸出二百千光一。一一光說二六波羅蜜一。

一一菩薩二手皆執如意寶珠。其珠金光青赤白及摩尼色皆悉具足。如是圍遶諸光畫中。是名佛頸出圓光相。㊱

(15)云何觀如來缺盆骨滿相。滿相光明遍照十方作虎魄色。若有衆生遇此光者。自然興發聲聞道意。是諸聲聞見此光明。分爲十支。一支千色。十千光明光有化佛。一一化佛有四比丘以爲侍者。一一比丘皆說苦空無常無我。㊳

(16)如來手足柔軟如天劫貝。自有衆生樂觀如來手內外握。㊵

(17)萬字名實相印。諸佛如來無量無邊阿僧祇劫學得此印。得此印故不畏生死。不染五欲。佛告阿難。佛滅度後佛諸弟子。見佛胸相光者。除却十二萬億劫生死之罪。㊷

一一化佛。遣下一化人端正微妙。狀如中彌勒上。安慰行者。見此相光者除二十二億劫生死之罪。㊶

(18)二十八如來心相。如紅蓮華。妙紫金光。以爲間錯。如瑠璃筒。懸在佛胸。不レ合不レ開。團圓如レ心。萬億化佛。遊佛心間。又無量塵數化佛。在佛心中。坐金剛臺。放無量光。一一光中。亦有無量塵數化佛。出廣長舌。放萬億光。作諸佛事。念佛心者。除十二億劫生死之罪。㊸

(19)三十四如來陰藏。平如滿月。有金色光。猶如日輪。如金剛器。中外俱淨。㊺

(20)四十世尊足下千輻輪文。輞轂衆相。無レ不圓滿。瑜伽云。於其父母。種々供養於諸有情。諸苦惱事。種々救護由往來等動轉業。故得此相云云。見千輻輪相。除劫極重惡業。四十一世尊足下。有平滿相。妙善安住。猶如奮底。地雖高下。隨足所レ蹈。皆悉怛然。無レ不等觸。大經云。持レ戒不レ動。施心不レ移。安住實語。故得此相云云。其足柔輭。諸指纖長。鞔網具足。內外握等相及業因同前手。㊼

(18)如來心者如紅蓮華。金華映蔽。妙紫金光以爲間錯。妙琉璃筒懸在佛胸。見佛身內萬億化佛。是諸化佛遊佛心問。㊹

(19)佛有馬王藏相。與身平等七合盈滿。如金剛器中外俱淨。爲度衆生出現是相。㊻

(20)如來足下平滿不容一毛。足下千輻輪相。轂輞具足魚鱗相次。㊽

二

仏の相好である三十二相や八十随形好については諸経論に説示されるところであるが、その内容や順序などについては一定していない。[49] また三十二相と八十随形好の間にも出入りがあって、経典によって説きかたが異なる。『観仏三昧海経』については観相品にその記述がみられるが、三十二相と八十随形好の区別すら明確でない。[50] 相か好かがはっきりしなくても、『往生要集』の四十二相として、少なくとも名称が一致するものについては二十四相がある。そこで先きに示した対照によって影響を検討すると、『往生要集』が受けた相についての特色が明確になってくる。

二十四相のすべてを的確に対照させることが困難な場合もあり、(11)(12)(14)(20)については二相を同時にあげた。そこでこれら二十四相の対照によって分析してみると、

Ⓐほぼ一致するもの――(3)(4)(7)(10)(12)(14)(15)(16)(18)

Ⓑ部分的に一致するもの――(2)(8)(9)(11)(13)(17)(19)

Ⓒ名称のみ一致するもの――(1)(5)(6)(20)

に分類することができる。この対照によって『往生要集』のなかの、とくに仏の上半身の諸相を中心に『観仏三昧海経』の影響を受けていることが知られる。二十四相中、実に十九相がほぼ、あるいは部分的に記述が一致しており、明らかに『観仏三昧海経』の内容を受けたものであり、重視されなければならないことが指摘できる。十九相という数は四十二相中、半分近くに迫るものである。Ⓑ群については利益の面を受けたものが多く、これも源信自身「諸の利益は観仏経に依る」といっていることが証明される。

次に前述の対照表によれば、また次のことが明らかになるであろう。『往生要集』の四十二の別相観において、光明に関する相、あるいは相の説明の内容を有するものは、次の二十六相である。すなわち(1)頂上肉髻(2)頂上髪毛(3)髪

際五千光(4)耳厚広長(6)面輪円満(7)眉間白毫(8)如来眼睫(9)仏眼青白(10)鼻修高直(11)脣色赤好(12)四十歯斉(13)四牙鮮白(14)舌相広長(17)頸出円光(18)頸出二光(19)缺盆骨満(21)如来腋下(22)仏雙臂肘(23)諸指円満(27)胸有卍字(28)心相妙光(29)世尊身皮(30)身光任運(34)如来陰蔵(36)世尊雙腨(42)足下生一華である。この二十六相と『往生要集』が引用する『観仏三昧海経』とを対照すると、一致する相が(1)頂上肉髻(2)頂上髪毛(3)髪際五千光(4)耳厚広長(7)眉間白毫(8)如来眼睫(9)仏眼青白(10)鼻修高直(11)脣色赤好(12)四十歯斉(13)四牙鮮白(14)舌相広長(17)頸出円光(18)頸出二光(19)缺盆骨満相(27)胸有卍字(28)心相妙光(34)如来陰蔵(42)足下生一華の十九相にも及ぶ。これらの相と先きの『往生要集』と『観仏三昧海経』との対照によって、光明ともっとも関連深いものを拾いあげてみると、(2)頂上髪毛(3)髪際五千光(4)耳厚広長(8)如来眼睫(9)仏眼青白(10)鼻修高直(11)脣色赤好(12)四十歯斉(13)四牙鮮白(14)舌相広長(17)頸出円光(18)頸出二光(19)缺盆骨満(27)胸有卍字(28)心相妙光(34)如来陰蔵の十六相である。四十二相中の三分一以上に相当する。さらにこのうち『観仏三昧海経』のみの影響を受けるものとして(3)髪際五千光(4)耳厚広長(17)頸出円光(18)頸出二光(19)缺盆骨満の五相がある。いずれも光明の内容を深く受けるものばかりである。このようにみてくると『往生要集』が、多くの三十二相を説く経論の中でも『観仏三昧海経』から受ける内容は、とくに光明に関するものであるという特色を知ることができる。それは『往生要集』の観相が白毫観に統摂されてくることと無関係ではなさそうである。[31] さらにそれは『往生要集』撰述に先きだつ『阿弥陀仏白毫観』を著わすに至った源信浄土教の特色が根強く表明されることであるといってよい。それは光明摂取のはたらきを強調することに特色があり、しかも『観仏三昧海経』では主に上半身について強く影響を受けることと関係があると思われる。白毫を中心に光明摂取のはたらきを求めたようである。

結

『往生要集』の別相観における四十二相の内容を、とくに『観仏三昧海経』との関連性を中心にみてきた。ここで

知られることは、源信自身が「三十二相の略相は多く大般若に依り、広相随好および諸の利益は観仏経に依る。」といっているように『大般若経』と『観仏三昧海経』とに依って構成されていることが、まず数量的にも証明できる。また両経から受ける特色として、如来の上半身の諸相は主に『観仏三昧海経』に、下半身の諸相は主に『大般若経』に依っていることが知られる。そして上半身について『観仏三昧海経』に依る特色として、とくに光明の内容に関係していることが知られる。しかも光明摂取のはたらきは白毫観を背景としており、別相観はじめ『往生要集』の色相観の特色をなすものである。光明摂取のはたらきは如来の全身に依るものであることはいうまでもないが、とくに白毫観にそれを代表させていることが、上半身に集中的に『観仏三昧海経』の影響を受けることになったのではないかと思われる。それは源信が浄土教に志してから早い時期にまとめたと思われる『阿弥陀仏白毫観』とも深く関係するようである。

〔註〕

① 『往生要集』では、竜樹の『十住毘婆沙論』一二（『大正新脩大蔵経』―以下『大正』―二六・八六上）の文を引いて色相観を勧めているが、別相観・総相観などの起源についても問題となるであろう。

② 拙稿「『往生要集』の色相観」（『叡山学院研究紀要』七）参照。

③ 『恵心僧都全集』（以下『恵全』）一・一〇四。

④ 『観仏三昧海経』における相好の諸問題については、山田明爾稿「観仏三昧と三十二相」（『仏教学研究』二四）参照。

⑤ 諸経論によれば、諸仏の相は三十二相であるが、源信が四十二相をあげることについては、前掲の拙稿で論究した。

⑥ 拙稿「『往生要集』の白毫観」（『浄土宗学研究』一五・一六合併号）参照。

⑦ 『観無量寿経』の定善の第九仏身観には壮大な光明摂取のはたらきを示す白毫観が展開する。

⑧ 『恵全』一・九五。

⑨ 『大正』一五・六四八下。

⑩ 『恵全』一・九六。

⑪『大正』一五・六四九上。
⑫『恵全』一・九六。
⑬『大正』一五・六四九中。
⑭『恵全』一・九六。
⑮『大正』一五・六五六中。
⑯『大正』一五・六六四上。
⑰『恵全』一・九六。
⑱『大正』一五・六四九中。
⑲『恵全』一・九七。
⑳『大正』一五・六五五中。
㉑『恵全』一・九七―九八。
㉒『大正』一五・六五六上。
㉓『恵全』一・九八上。
㉔『大正』一五・六五六上。
㉕『恵全』一・九八。
㉖『大正』一五・六五六下。
㉗『恵全』一・九六。
㉘『大正』一五・六五七上。
㉙『恵全』一・九八。
㉚『大正』一五・六五七上。
㉛『恵全』一・九九。
㉜『大正』一五・六五七上―中。
㉝『恵全』一・九九上。

㉞『大正』一五・六四八上。
㉟『恵全』一・九九。
㊱『大正』一五・六五九。
㊲『恵全』一・一〇〇。
㊳『大正』二・六六四。
㊴『恵全』一・一〇一。
㊵『大正』一五・六四八中。
㊶『恵全』一・一〇一。
㊷『大正』一五・六六五中。
㊸『恵全』一・一〇二。
㊹『大正』一五・六六五中。
㊺『恵全』一・一〇二―一〇三。
㊻『大正』一五・六八七上。如来陰蔵相は、特別に一品をたてている。
㊼『恵全』一・一〇三―一〇四。
㊽『大正』一五・六四八下。
㊾『往生要集』では、おそらく『観仏三昧海経』を受けて、頂上肉髻から足下生一華相へという順観からはじめる立場をとっている。
㊿『観仏三昧海経』の「観相品」（『大正』一五・六四八以下）参照。
(51) 白毫相の起源については、田辺勝美稿「眉間白毫相のイラン起源考―仏像のイラン起源論序説」（『仏教芸術』一六二）がある。また人類学の立場から論じた嶋善一郎稿「仏説観無量寿経に於ける白毫相について」（『竜谷大学論集』三六一）も興味深いものがある。